

## メッカの洪水

花田宇秋

地名・人名の原語表記が定着して久しいので「メッカの洪水」としななければならないのだが、“進歩的”ジャーナリズムの権化たる大新聞が未だにバグダードをバグダッド、カーブルをカブールと表記する頑迷固陋さに肖って「メッカの洪水」とした。

さて、昨年の暮、「メッカの洪水」のニュースがテレビに放映されて我々を驚かした。その場が洪水など予想も出来ない沙漠地帯のメッカだったこと、その時がムスリム最大の年中行事の「大巡礼」時だったことが話題性を増幅した、というよりは地球温暖化現象の一つの証として「メッカの洪水」が捉えられたからだろう。

ところが私にとってそれは驚異ではなく、むしろあるべくして起った歴史のサイクルの一事象であった。例えば、M.T.アルクルディー著『真説、メッカと神の館（カーバ神殿）の歴史』メッカ、1965年によれば、「メッカの洪水は有史以来89回に及んだ。今のサウディ・アラビア王国になっても数回あり、1942年のそれは最大級のものであった。水はカーバ神殿の窓の敷居にまで達したため、タワーフ（巡礼行事の一つでカーバ神殿を左回りに7回行なうこと）は中止された」という。また1950年にもあったというから、今回の洪水は約半世紀ぶりのものであった。

さらに昔に遡るならば、史家バラズリー（892年没）は『諸国征服史』で「メッカの洪水」にふれ、次のように記している。「メッカは〔イスラム以後（622年以降）〕4回（正しくは6回）洪水に見舞われた。その一つがウンム・ナフシャルという名の洪水で、ウマル（正統第2代カリフ）の治世中（634－644年）におこった。メッカの山の手より〔市中を貫流し〕聖なるモスクに浸水するに至った。（中略）またジュハーフという名の洪水があった。これは〔ウマイヤ朝カリフ・〕アブド・アルマリク時代の80年（699年）におこった。月曜日の朝に巡礼者を急襲し、かれらをその所持品ともども押し流し、さらに奔流はカーバ神殿に至って渦を巻いた。ムハッビルと呼ばれた洪水もあった。この洪水があった後、暫の間人々は身体の一部や舌が麻痺する病気に犯された。そこでこれは“麻痺させる者（ムハッビル）”と命名されたのである。その後にあったのが120年（738年）のそれで、その時巡礼中だったヒシャーム（ウマイヤ朝第10代カリフ）の息子アブー・シャーキルの名に因んだそれである。その後もメッカの涸谷ワーディー・マッカに発する洪水がメッカに來襲した。さらにマームーン（アッバース朝第7代カリフ）の治世中（813－823年）にも大洪水があり、大水は黒石（カーバ神殿の壁に嵌め込まれた聖石）の高さに近づいた。」（拙訳『諸国征服史—3—』『明治学院論叢』第419号、1987年、P.88—91を一部改変）

これらの記載からするとメッカの洪水は約50年周期でおこっている。従って今回の洪水はこのサイクルからすれば異常ではなく、むしろ正常なのだ。一年単位の周期では異常でも50年単位の周期ではごく順当である。従って地球温暖化現象も何万年、何百万年、何億年単位の周期からすれば正常なのかも知れない。そうであればそれは人間存在を超えた地球史のサイクル、インシャーラーの世界のことである。

はなだ・なりあき（所員・本学教養教育センター教授）